

メズール様のために、転生者がやりたい放題するお話。

謎のks

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作者の息抜き短編シリーズ第三弾、今回はリクエスト作品です。仮面ライダーオーズの世界に、転生者が介入し、同作品の悪役「メズール」と添い遂げるため、邪魔者どもを駆逐していく…というお話。ここで注意点。

1. 「fat eシリーズ」の要素が若干入っています。
2. 他仮面ライダーネタも若干入っています。
3. 小説版オーブの設定が入っています（先代オーブの容姿とか？）TVドラマ版と食い違う部分があるかもしれません。
4. 細かいことは気にしない☆

以上を踏まえてご閲覧ください。

メズール様のために、
転生者がやりたい放題するお話。

目
次

メズール様のために、転生者がやりたい放題するお話。

俺の名前は水野 壮（みずの そう）。

元地上人の、現死人ダゼ☆

サラリーマンだった社畜の俺は、ある日交通事故で死んでしまうのだった…と、どつかの艦これ作品（作者のとある自作品）と似たような感じ、つてかテンプレだ。

突然だが俺が好きだったのは「仮面ライダー」特に平成ライダー、特にとくに「仮面ライダーオーズ」が好きだった！

映司とアンクの一味違う友情に泣き。

ドクター真木イ！の「良い終末を…」に恐れ戦き。

比奈ちゃんの「ふんにゅー」に癒された…。

欲望がテーマ、つて聞いてたから最初はどうなるかと思ったけど：敵味方問わず魅力的なキャラクターが多く「流石靖〇にやん！」つて唸つたよねえいやあく良かつた。

…ただ、一点を除いて。

— ”メズール様”が救われていない…！

いや…確かにさ、悪役だし？ 怪人だし？ 頭シャチだし!? 最期まで欲望の権化だつたけど。

でも…その欲望の源は「愛」だと思うんだよね。

つまりさ、救われても良かつたわけじゃん。正義と愛はワンセットだよ！ 何よりエロいんだよ！ CVゆ○なさんだよ!! 因みに俺は怪人態が好き（異論は認める）。

そう…俺は彼女を救いたい…もしその願いが…欲望が叶うなら…。

— 俺は”何でも”する…！

・・・

「というわけで、オーブ世界に転生で、よろ」

そんなことを軽く言つてのける俺、とある空間にいて、一面真っ白で無限の広さを感じる。さつきの言葉が、コンサートホールのように虚空に響いて消えていった…。

そして目の前には…。

『了解しまシタ。時代はいつごろにしまショウ?』

白く光る球体がふわふわと浮いていた、そう神様だ、誰がなんと言おうと神様だ。

死んで現世にオサラバした俺は、この空間に連れ込まれ「第二の人生を送れます」と言われた。そう、「転生」だ、いわゆる”なろう系”だ。

「んーそだな。とりあえず「原作終了後」で

オーブ世界の原作終了は「映司（主人公）」がアンク（相棒）の形見である壊れたメダルを携えて、また旅に出る…というもの。

そう、お気づきの人もいよう。原作終了後は「全ての戦いが終わつた後」なのだ、つまりメズール様はいない。まあ待て、俺に考えがある。

『了解しまシタ。：；特典”が御座いますが、如何しまショウ?』

来たつ！ ”特典”！

特典とは「一般人がスー〇ーマンになれる方法」と覚えとけば良い、ってか俺はそう認識してる。

対象の欲する能力、又はアイテム入手することが出来る、つまり…ここでメズール様を…！

――なんて言うわけないだろ？

俺はメズール様に相応しい男になりたい、彼女を永遠に愛てるためには「悪」に墮ちるしかない。つまり「王道より邪道」だ。

フフフ……ここは。

「じゃあ「聖杯」寄越せ」

『了解しまシタ。』

機械的なアナウンスが流れると、俺と神様（という名の球体）の間に光が差し込む……これが「聖杯」か。

聖杯は「f a t eシリーズ」という作品における物語の要であり、なんでも願いが叶えられる願望機だ。これを奪い合うため血みどろの争いが起こるのだが……まあ今回は省かせてもらうわ。

形は…よし、小さめでオーノドックスな器だな。よくある「f g o 系統の聖杯」みたいだ、これでムーンセルが来たらどうしようかと…。『貴方の願望をスキャンし、可能な限りの要望をクリアし、そして出力以上の代物をご用意させていただきまシタ』

「おーすげえな。ご苦労さん…っし！」

手をかざし、聖杯を手に取ると、そのまま聖杯は俺の身体に吸収されていった…計画どおり、つてな？

「よおし。…出でよ「オーブドライバー」！」

今度は手を上にあげる、すると…光と共に「オーブドライバー」が俺の手に…！

「ツシャア！ 先ずは変身ベルトだよな！ 後メダルは…」
仮面ライダー オーズに変身するためのアイテム、オーブドライバー。

オーズドライバーに三つのメダルをセットし、スキャンして変身する。この場合あと必要なのは「メダル」だけだが？

「先ずはタカ、トラ、バッタ」

メダルの名前を呼ぶと、光が現れ「赤、黄色、緑のメダル」が。オーブの基本フォームになるためには必要なメダルだ。で、お次が本命…。

「シャチ、ウナギ、タコ！」

俺がメダルの名前を叫ぶと、またしても光と共に「青色のメダル」が出る。三種類×三の九枚分だ、メズール様を完全復活させるにはこれがなくてはならない。

これでメズール様を蘇らせ、戦いが終わった平和な世界で悠々と…！

いいやまだ終わらねえ

これは「復讐」だ。

メズール様をよく知りもせず、敵として斬つて捨てた欲望の権化どもめ…この聖杯の力で、俺とメズール様の理想郷を構築する。そのためには…。

「ヤツらを「倒して」あの世界を俺の手中に収めてみせる。…フフフ、フハハハ…ハーツハツハツハツハ!!」

『お決まりの三段笑い、素晴らしいデス。それでは良い来世ヲ♪』

「…ありがと」

…

…気がつくと、そこは森の中。

倒れた自分の身体を起こし、手を確認する。まさか…存在している

? 私が…?

私はあの時…確かに「消滅」したはず…?

『まだよ…こんなんじや全然足りない！ もつと…もつと…っ!!』

そう…私は自らの欲望…「愛」を求めて…親と子供を攫い…その怯えながらも気高い「愛」を愛でていた…そこへ現れた「オーズ」との戦いで、私は敗れた。

…なのに、これは？

「気がつかれましたか、メズール様」

静かな夜の森の中、私は声のする方向を向く。

そこに立っていたのは、人間で言うと二十代ぐらいの青年だった。なんとなくだが「顔が整っている」という印象を受ける、私は「グ

「リード」だからあまりそういうことに着目しない。私に「相応しいかどうか」ただそれだけ。

それにこの男：出会つて間もない私の名前を知つてはいる、更に「メズール様」と呼んでいる、今の私は「どう見ても怪物」の姿をしている。魚の化け物と揶揄されたこともあつた、どう考へてもこの男の反応はおかしい。

「貴方…どなたかしら？」

そういう私の質問に答えず、彼は私の前に屈んだかと思うと、そのまま跪く。

「私は貴方の忠実な僕です」

：面白いことを言う人間もいたものだ。

私は「ふうん？」と興味を示しつつ、謎の男を見つめる。この欲望の権化と称された怪人「グリード」その私に対して恐怖ではなく「忠誠」を覚えるなど…正気ではない、そう感じる。

「…ツフ！」

「うお！」

手をかざし、高圧水流で吹き飛ばす、水流を操るのが私の能力。

「…無様ね」

そう言いつつ足で男の身体を踏み付ける。

「あふうん」

「何が目的なの？ 私がグリードだと知つてのこと？ この私に忠誠だなんて…私の欲望、叶えてくれるってこと？」

私の欲望は「愛」だが、それを人間如きに満足させられるとは思えない、私を愛し愛されることの出来る存在が…。

「叶えさせて欲しいです、私の第二の人生を貴女に捧げたいです。あと気持ちいいのもつと踏んで下さい」

「…なんなの貴方？ そもそも何故私の名前を知つているの？ …何者なの？」

「疑問は最もです、事情を話させてください」

「…いいわ」

とりあえず話を聞くため脚を退ける。

彼は立ち上がると、私の前に向き直る。

「…私は転生者なんです」

「は？」

「貴女を蘇らせたのは僕です、貴女やオーブのことも知っています。TVで見ました、僕は貴女のことが好きで堪りません。僕こそ貴女の欲望を「満たせる」存在だと自負します！」

「…馬鹿じやないの？」

まさか法螺話をしてくるとは、しかも訳の分からないことをペラペラと。

呆れた私はその場を立ち去ろうとする。

「待つて下さい！ 僕こそ貴女に相応しい男です!! 信じてください！」

「…グリードに「信頼」を求めようなんて。話にならないわ、出直して来なさい」

「…つ！ ううおおお!!」

「はあ、やっぱり貴方も裏切るの…」

溜め息を吐きながら、私は纏わりつく彼の対処をするために振り返る。

…瞬間、私は彼の「行為」に衝撃を受ける。

「…つ!!」

何と。

…この怪物の顔に「接吻」して来たのだ。

「んむううううう!!!」

「つ!」（この…!）

密着する彼の身体を「水圧」で吹き飛ばす。

「ぶつぶえつ!? …うおお!! やっぱ特撮じゃねーつ！ マジに本物だああ！ 舌入ったよ！ あとなんかヌルヌルした、身体から粘液？ サイツコリーっ！ ふおおおお!!!」

…また訳の分からないことを口走る男、興奮しているのかボディランゲージで腕を振り上げて喜びを露わにしていた。

本当に分からぬ。この子…本当に私…?

「貴方、どういうつもり？ 私が見えないの？ この身体は人間のものじゃないわ「怪物」よ、貴方は前に私を見たと言つたけど、私が人間にも変身出来るから？」 擬態目當てに私を愛するというの？」

「違いますっ！ 確かに可愛いけど…僕が愛しているのは「怪物」の貴女です！ ヌルヌルOK！ エロボディアンドエロ声サイコー！」

「…頭が痛くなつて来たわ。ますます分からぬ、貴方…本当に人間なの？」

「貴女を愛することが出来るなら、僕はっ、人間を止めます!!」

「…っ！」

「その覚悟でここまで来ました。僕は貴女と添い遂げるために第二の人生を送ります！」

「…貴方、目的はなんなの？ 私に愛を捧ぐということが最終目的なの？」

目的を問われた彼は、又も立ち上がる。その姿は「かつてのオーブ」を彷彿とさせたが？

「復讐です。貴女は愛を手に入れようとしただけ、その愛おしく優しい性質を知らずに、この世界の欲望の塊ドモは！ 貴女を淘汰した！」

：僕はそれが許せない。貴女と共に歩める世界に！ この手で作り変えてみせる。…そのためには、邪魔者どもを「消さねばならない」

⋮ツクツクツク

⋮ああ、私はおかしくなつたのだろうか。

目の前の男は、この世界のどんな欲望の権化よりも深く、黒く、悍ましい感情を秘めている。

だがして、彼には人を欺く知性や、自らの願いを優先するエゴイスティックな面は感じない、存在しない。ただただ子供のように純粹な「欲望」にまみれていた。

それを証言するように、彼の顔は歪み、同時に瞳に無垢な光を宿している…ガメルとはまた違う子供みたいな、そして彼にはなかつたギラギラした欲望。

ああ、なんて……！

「素敵…！」

「気に入つて頂けましたか？」

「ええ、とても。…私は貴方の欲望が気に入つたわ」

「…僕が、じゃないんだ…」

「しょげないの。私のことを本当に愛するというなら、私を満足させるほどの「無限の愛情」を捧げる氣でいなさい？」

「勿論です！ 何度も捧げましようとも！」

「うふふ…！」

「それでアナタ？ これからどうするつもり？」

「つわ、坊や呼びじやないんだ」

「貴方はもう私のモノだもの、他人行儀なのは嫌でしょう？ …そういえば、名前聞いてなかつたわね？」

「…僕は水野 壮。貴女に全てを捧げる者です」

その自信に満ちた発言に、私はニヤリと笑う。

「いいわ、ソウ。貴方の欲望は面白い、でもその強大な欲望は私でも制御出来るか怪しい。だから…私のためにじゃなく、貴方自身の欲望を満たすために戦いなさい？」

「…？ それってどういう意味ですか？」

「分からぬ？ 貴方が欲望の限りを尽くせば、私は貴方の欲望からセルメダルを抽出出来る、更に貴方の言う私への「愛」が、私自身の欲望を満たせるほどの大きなものになれば…もちろん貴方次第だけど、貴方の欲望も「果たせる」かもしれない」

「それは…遠回しのプロポーズですか！」

「もう、気が早いわね？ …まだ足りないわ、でも「将来性」はある。その時が来るまで、貴方の傍で私が見届けてあげる」

「おお！ やつたー！ …ふむ、なら僕の好きにしていいので？」

「ええ、私が見守つてあげるから、存分に楽しみみなさい？」

「なら…お言葉に甘えて」

ほくそ笑む彼が手のひらをかざすと、光が視界を支配する…真っ白な光は…盃の形に変わる。

「…これは？」

「聖杯と言われる、この世界にはない力です。この力は使用者の欲望を叶える「願望機」であると言われています」

「…っ！ そんなものが…」

「この力で、僕は貴女に相応しい男になつてみせる！ …ツクツク！
待つていろよ：オーズ、そして欲望の権化共！ 最早貴様らには…
欲望すら抱かせない、ハツハツハツハ!!」

彼の悪意に満ちた表情は、とてもイキイキして、それでいて残忍だと一目で理解出来る。

そんな彼の顔に、私はどこか満たされた気持ちになることを感じていた…。

・・・・・

警視庁に「何者か」が暴れています、と通報が入った。

それも、暴漢や酔っぱらいの類ではない。怪物なのだという…その怪物は「ミイラのような」ものと、それらを操る「魚の化け物」が確認されている。

警察は怪物の被害者の病院搬送、及び街の人々の避難を優先する…が、そんな中怪物たちの中心に急ぐ、一つの影がある…？

「…これは」

彼の名は「後藤 慎太郎（ごとう しんたろう）」かつて世界を守るために、仮面の戦士として戦つた者。現在は警視庁の刑事に復帰している。

後藤の眼前には、人々を襲うミイラの怪物「屑ヤミー」の姿。

「つ、早く逃げて！」

後藤は屑ヤミーの毒牙に襲われそうになつた人々を助ける、蹴りを入れて怯ませると逃げる事を催促、お礼を言しながら背を向け走り出す人々。

「どうなつている…？」 グリードは完全に消滅したはず…？」

後藤が訝しんでいると、どこからともなくヒールの音が聞こえる。
「お久しぶり、バースの坊や」

「つ！ メズール！ 馬鹿な…お前は確かに火野が」「復活したの。彼のおかげでね？」

怪人メズールの示す方から、大股歩きで近づいてくる謎の男。

「お前は？」

「僕は「水野 壮」…お前たちの敵だ」

「つ、何のつもりだ！ どうやつたかは知らないが、グリードを復活させるなんて！」

「何をしようと僕の勝手…じゃないのかな？ 君のかつての上司は欲深くあれ」とかほざきそうだけど？」

「…つ！」

後藤の視線は、壮と名乗る男の近くをうろうろする脣ヤミーを捉えている。

「…」のヤミーはお前が？」

「そう、メズール様のお力を借りてね？ 適当に暴れたら必ずお前らは姿を見せるだろうと踏んだわけ」

「俺をおびき寄せるため？ 何が目的だ！ 無関係の人間を巻き込んで…」

「黙れ5103」

「…つ?!」

「お前はあくまで前菜、メインディッシュを彩るパセリでしかない。お前を倒せば…必ず「ヤツら」が来る。せいぜい派手にやられてくれよ？」

「あん、いいわよ。ワルモノって感じのセリフ、やれば出来るじやない？」

メズールが壮に近づくと、頭を優しく撫でた。

「でへへ、もつと褒めて♪」

「んふ…♪」

「お前たち…ふざけるな！ 今すぐこの騒ぎを止めろ!!」

怒り心頭の後藤は、騒ぎの張本人たちの「まるでお遊び」な態度を崩すため、勢いよく走り出しど壮にめがけて拳を食らわせる。

「はあ！ …つ?!」

…が、何者かがその拳を遮り防衛した。

それは壮ではない、後方でメズールと共に成り行きを見守つてい

た。…では誰が止めたか？

「…フン、踏み込みが甘いぞ青年。その程度で我がマスターに刃向かうとは」

「つ！ 黒い甲冑…？ 誰だお前は！」

「口の利き方がなつてないな。…矯正してやる、有り難く受け取れ」

そう言うと、黒い甲冑ドレスを着た少年或いは少女は、後藤の拳を防いだ剣に光を注ぐ。

聖なる光と対をなす「黒に染まる光」…。

「はあつ！」

「つぐあ!!」

不気味に鳴動しながら黒き剣は邪光を放ち、後藤を吹き飛ばした。

「…つ！ 何だコイツは？ グリードではないことは確かだが」

「ソイツは伝説の英雄さ？ 尤も…僕の欲望に感化されてか、黒いのしか呼べなかつたけど？」

「何…？」

「さあ改めて…この世界の強欲な馬鹿どもに鉄槌を下す。僕に力を貸せ、サーヴァント・セイバーオルタ！」

「…いいだろう。この暴虐の剣、せいぜい使いこなしてみせろ」

セイバーオルタと呼ばれた年若い少女は、黒剣を構えながら後藤にジリジリと近づく。

「…マスターの願いは、この世界への復讐。お前で…一人目のようだな」

「つ…」

「…終わりだ！」

セイバーオルタがその剣を振り上げた。…その時。

「（スキャニングチャージ！）セイヤーツ！」

「…つぬ！」

セイバーオルタは何かを感じると、すぐさまその場を飛び退いた。瞬間…三つの光輪を潜り、勢いよく降下ざまのキックをお見舞いする謎の影、その威力は尋常でなく地面のコンクリートに大穴を開ける。

「この技は…まさか！」

土煙の向こうに、黒光りした姿が浮かび上がる。しかしセイバーオルタではない「身体のあちこちにカラフルな意匠」が凝らされていた。

「火野！」

彼が火野と呼ぶ人物は、かつてのグリードとの戦いを終わらせた張本人。後藤の戦友：仮面ライダー オーズ 「火野 映司（ひの えいじ）」 その人だつた。

「後藤さん！ 大丈夫ですか？」

「ああ、でもお前旅は？」

「えへへ、ちょっと里帰りというか。皆を驚かせたくて…でも、帰つて来て良かつた」

そう言いながら、黒い仮面の戦士オーズは同じく黒き騎士を見つめる。

「…フン」

「あれ？ よく見たら女の子!? わあ：怪我はないみたいだけど」

「言つてる場合か火野！ あの黒甲冑はグリードより厄介かもしけない」

「…ん？ 後ろにいるのはメズール？ は良いとして…君は？」

オーズはメズールの隣で、オーズを睨みつける男を指差す。

「…ふ

「ふはははは！」

「…っ！」

「まさかいいきなり出てきやがるとはな？ 会えて嬉しいぜ、仮面ライダー オーズ、火野 映司！」

「…俺のことを知つてる？」

「知り合いじゃないのか、火野？」

「いえ。でも…どうやら彼の狙いは俺みたいですね」

「ご明察。僕はメズール様を碎いたお前を許さない、必ず倒す…そして、メズール様との理想郷を創り上げるのだ」

壯の言い分に、映司はどこか腑に落ちない様子。

「んー？ メズールと一緒にいたいんなら、俺を倒す必要ないんじや

ない？ 寧ろ応援するよ」

「火野！ こんな時に何言つてる!?」

「でも後藤さん、彼はなんとなくアンクに似てるというか…悪いヤツには見えないんです。だから…」

「いいや火野 映司。お前はそうやって油断させて、いざという時に邪魔をする食えない男。僕の霸道を垣間見た時に同じセリフが言えるとは思えない。…今ここで、決着をつけなきゃ気が済まない」

「…っ！」

「（ふうん、そこまで見抜いているのね？ 確かにこの男は油断ならないわ。…うふ、前世だと私には分からぬけど、やつぱりこの子：面白いわ！）」

メズールは改めて、壮の目敏さに満たされた気持ちになる。

「いくぞ…オーブドライバー！」

壮が叫ぶと、ひとりでにドライバーが腰回りにセツティングされる。その形状は、映司たちにとつて見慣れたものだった。

「オーブドライバー!?」

「何故だ!? オーブドライバーはこの世で一つのはず…！」

「よし、メダルセット」

映司たちの驚きをよそに、壮はどこか楽しそうに「赤、黄、緑」のメダルをドライバーにはめていく。そして…スキナーを構えて、ドライバーのメダルをスキヤンしていく。

「…変身！」

彼の世界では誰もが憧れるであろう「変身」。だが…？

『タカ！ トラ！ バッタ！』（重低音）

「…っ！」

『タトバツ、タトバ、タットツバ！』（超重低音）

何事が起こったか、壮のドライバーからいつもの掛け声が「ワントーン下がった状態」で発せられる、そして稻妻が走ると、突然黒いオーラに包まれる。

「わああつ!？」

その場の全員が目を伏せた。

…そして、静寂に包まれた瞬間。目を開けると…?

「…ん？ なんか、違う…?」

映司が目の前の「壯版オーブ」を見て呟いた。

後頭部は鳥を連想する赤い翼。

顔には嘴を思わせる鷲鼻と、歯を剥き出しにした口。

首の周りは、元のオーブには無い白い毛が生えている。

腕部にはトラクローラしきものがあるが、むしろ虎の爪そのものと
いつた具合か、身体の一部として一体化している。

肩はトゲの付いた肩鎧のような見た目。

脚部はバッタの要素が強まつて屈折し、本物の昆虫に近い見た目となつて いる。

「…あるえ～～??」

壮も異変に気付いた。周りはまるで歪なオーブを不思議がついていたが、壮自身はこの形態に心当たりがあつた。

「これ「ジオウのアナザーオーブ」じゃーん!? うーわ、ベルトも中のメダルも変わってる…そんなに欲深いか俺？ 檀黎斗神みたくなつちやう!」

「ふうん？ よく分からぬいけど…オーブの坊やはオーブの力を使いこなせてないと思うの。だからその姿は…オーブの力を「最大限に引き出した」姿なんじやない？」

「…え、そなんですか？」

「ええ…（忌々しいけど似てるもん、800年前のあのオーブに…!）メズールの太鼓判に氣を良くしたのか、壮は自信たっぷりに言つてのける。

「だそうだ！ 僕の方がオーブに相応しいってことだな？ ええ？

火野くうん？」

「あはは…良かつたんじやない？」

「負け惜しみで言うつもりじゃないんだが…そのオーブ「典型的な悪役」という感じがするぞ」

後藤の発言に、シヨツクを受ける壮。

「がーん!? 確かに悪役になりたいとは思つたけど…オーブの姿にま

で影響することないじゃん…」

「良いじゃない？ 悪に徹しなきや掴めない欲望だつてあるわ。貴方はどんな姿になろうと、貴方であることに変わりないんだから」

「つ、メズール様！」

「うふふ。…さあ、貴方の名前を。忌まわしきこの世界に叫んで、刻みつけるのよ！」

「はいっ！」

壮は前に歩み出ると、勇ましい王のように胸を張り、高らかに叫び宣言する。

「我が名はメズール様に全てを捧げるために再誕した男！ 水野 壮！ またの名を：仮面ライダー、アナザーオオーナーズ！！ まるで雄叫びをあげるように、愛に生きる欲深き獣が産声を上げた。

「さあ…覚悟を決めろ、仮面ライダーオーズ！ 貴様に…メズール様を碎いたことを後悔させてやる！」

「うふ…そういうことだから、大人しくやられなさい？ オーズの坊や」

「供物を捧げる時間だ。我が剣で貴様らの体を切り裂いてくれよう…！」

「つ、火野どうする？」

「俺は逃げませんよ、後藤さん。彼の怒りを鎮めるためには…俺が全効力でぶつからないといけないみたいだ！」

二人のオーズは戦闘態勢に入る、ここに「真の王」を決める戦いが幕を開ける。

・・・・・

「…素晴らしいッ！」

オーズたちの戦いを、秘密裏に観察する一人の人間がいた。

彼は、ドローンからの撮影により映された映像を見て、満足そうに豪快に笑う。

「アレはこの世界に新たに生まれた「オーブ」だ。しかもつ！　あのオーブは、800年前の我が先祖が変身した、初代オーブと形状が似ている。つまり彼の大きな「欲望」が、オーブの力に多大な影響を与えたということ。はつはつは！　実に面白い!!」

ビルの最上階の大きく開いた窓、そこから映される都会の情景を眺めながら、少しだけ眉をひそめた。

「しかし愛か…愛は非常に厄介だぞ。双方に見えない信頼が確立できれば揺るぎないものになるが、相手はグリイードツ、そう言つた感情は、逆に食われかねない。彼は果たして無事でいられるだろうか？」
自身の敵になり得る相手に対し配慮を口にするも、それも一瞬だけだつた。元の不敵な笑みを浮かべると、再び相手に対し祝福を送る。「だが彼には「自信」がある！　火野君にはない「未来に対する自信」…その源が何なのか、あの黒い甲冑の少女と何かしらの関係があるに違いない！　實に面白い…私は君に興味が湧いたぞ！」

「ハッピーバースデイ!!　新しい君の誕生だ！　歓迎しよう、この世界にようこと「アナザーオーブ」！　君の欲望をこの世界に、存分に開放したまえ!!」

人の行き着く欲望の果て、無限の欲望を抱えた青年はその境地に辿り着くか、はたまた世界がその欲望に喰われるか。

何れにしろ、この先の未来は欲にまみれた人の手に委ねられた。
「いくよ…！」

「来いっ！　お前を倒して…僕が新しい「オーブ」になる！」

転生者的新たな物語は、どのような結末を迎えるのか…？